『現代』 1989.7

■国際コンフィデンシャル

鄧小平とゴルバチョフの誤算

マルクス主義が世界から消える日

「動乱・中国」「経済危機・ソ連」の内情

〝老師〟と〝学生〟の歴史的会談が皮肉にも〝民主化〟への起爆剤になった。大波に揺れ動く両大国の行方をズバリ読み切る

中嶋嶺雄（なかじま みねお）
（東京外大教授）

共和国解体の危機はらむ

中華人民共和国は建国四十周年にして、きわめて深刻な体制的危機を迎えたといわなければならない。この五月二十日午前十時、建国後初めて、首都・北京に戒厳令が施行され、その後の状況は文字通り混沌としている。

今回の事態の流れをみると、四月十五日の胡耀邦・前党総書記の死をきっかけに発生した学生たちの民主化要求デモはかなり整然と行われてきていた。ハンガーストライキを中心にその輪を広げて広範な市民層の共感をかちとったのであって、中国当局が戒厳令を施行しなければならないような暴力的な破壊行動に出ていたのではなかった。にもかかわらず、なぜ中国当局は李鵬首相の名において戒厳令を施行したのか、まったく理解に苦しむといわざるを得ない。

この首都・北京における情勢の重大な進展に関しては、事態の動きに並行して、私もかなり詳しい情報を入手していた。それによると、ゴルバチョフ・鄧小平会談が行われた五月十七日の夜あたりから、学生たちの民主化要求闘争に呼応する動きが中国の当局内部にも広がるという深刻な事態が進行していったことがわかる。

すなわち、李鵬首相率いる国務院の内部に、そして鄧小平を主席とする党中央軍事委員会のなかに、さらに第三十八軍「万歳」部隊と呼ばれる首都警備隊のなかにも、天安門広場に集まった大衆に呼応する動きが生まれ、政府当局の内部に一種の雪崩（なだれ）現象を巻き起こしていった気配が濃厚だ。現に、首都警備の部隊を、山西省、湖北省などから動員した人民解放軍部隊と入れ替えるなどの動きもあって、事態は刻々と緊迫の度を加えていた模様である。

こうした状況のなかで、趙紫陽総書記と李鵬首相は五月十八日深夜、ハンストで倒れた学生たちを見舞い、学生側に譲歩する姿勢をみせたものの、同夜、人民大会堂で行われた李鵬首相と学生たちとの会見は完全に決裂。それ

ばかりか李鵬首相は、四月二十六日の『人民日報』社説に続いて、再び学生デモを「動乱」と決めつけた。そして状況がこのように拡大するにつれて、従来、党中央にくすぶっていた趙紫陽総書記と李鵬首相との路線闘争は決定的なものとなり、趙紫陽は党中央政治局のなかで完全に孤立し、失墜に追いやられたと一時は伝えられた。

このような路線闘争が一方に存在するなかで、体制内部にも反李鵬勢力が拡大し、それは当然の流れとして、中国共産党を牛耳る鄧小平ワンマン体制への不満、鄧小平退陣要求をかかげた学生運動と呼応するようになり、鄧小平＝李鵬指導下の中国当局をきわめて深刻な政治的危機に陥れた。この事態こそが、中国当局をして戒厳令に踏み切らせた決定的要因であったといってよい。

しかしながら、戒厳令の施行にもかかわらず、学生たちおよび彼らを支援しようとする側の動きは、中国全土に広がり、私の友人の大学教授や知識人、そして在日留学生たちも含めて次次と反政府運動に加わりつつあった。

こうした動きは、もはや反政府運動という域を超えて中国共産党体制そのものへの不信感となり、共産党による一党独裁の終焉を迎えるまで続こうとするエネルギーを秘めているといわなければならない。いま中華人民共和国は建国四十周年にして、共和国解体の危機に直面しているといっても過言ではないように一時は思われた。

抑えきれない民主化要求

中国における今回の動きを振り返ってみると、四月十五日の胡耀邦の死を契機に、胡耀邦を追悼するかたちで民主化運動の輪が広がっていったのだが、それへの一つの刺激要因となったのは、四月二十二日の胡耀邦葬儀における趙紫陽総書記の追悼演説であった。この演説で趙紫陽は、学生たちの熱望に反して、民主化運動における胡耀邦の功績に言及しなかったのである。

胡耀邦の功績を評価しないことが学生たちを刺激するのはわかってはいても、趙紫陽にはそれができなかった。なぜなら、趙紫陽自身が一九八七年一月の胡耀邦失墜によって党総書記の後継者となったのであり、また、すでに党中央の環境は胡耀邦評価を許容する

ようなものではなかったからである。

中国が陥っている著しい社会的、経済的混乱の主要な原因は、まさに趙紫陽の主導してきた経済改革と開放政策にほかならない。この急ぎすぎた改革と開放のために、スーパーインフレといわれるほどの物価上昇、幹部の特権拡大、「官倒」といわれる企業・官僚の癒着などの腐敗現象が広範囲に起こっている。そこでは大多数の中国人は改革と開放政策の受益者とはいえず、ほんのひと握りの新興企業家、万元戸と呼ばれる富農たち、党や行政組織の特権幹部のみが受益者となってきたという状況がある。

そういったなかで、この三月下旬から四月上旬にかけて開かれた全国人民代表大会では、李鵬首相の指導下に、「経済の調整と整頓」という名の厳しい引き締め政策が決定された。こうした状況では、経済改革さえうまくいかなかったのに政治改革などは望むべくもない、という絶望感が広がるのは当然のことであり、そうした苛立ちが、とくに学生や知識人層を捉えていたのである。

そうした土壌で盛り上がった今回の学生運動は、四月二十七日の大規模なデモ、五月四日の「五・四運動七十周年記念」デモへと勢いを増すなかで、「公有制から私有制へ」「共産党の一党独裁反対」などのスローガンも見られるようになった。つまり、民主化要求の高まりにつれて、今日の中国共産党体制そのものへの反逆を示すスローガンが出てきたといわざるを得ない。

このような状況を考えると、今日の中国は、経済的混乱による苛立ちや貧富の差の拡大などによって、どこに火をつけても燃え上がるような趨勢にあったからこそ、民主化闘争が瞬く間に大きな広がりをもってきたといってよい。そして学生たちが突きつける切実な要求は、このままでは中国には希望がない、社会主義はもうダメだ、といったような絶望感に裏打ちされているだけに、きわめて根強い社会的背景をもっていると思われる。この点が、従来の中国の学生運動、民主化要求と今回のそれとが決定的に異なっているところであり、それだけに当局は事態を真剣に受け止めるべきであった。

しかし実際には、学生たちの要求に対して何らの解決策も指し示さなかったばかりか、戒厳令施行に当たっての李鵬首相の声明は、なんと、〝ひと握りの分子が政府転覆を画策〟といったトーンで一貫していたのである。

こうなっては、中国の状況はますます亀裂が深まるばかりであって、学生、知識人、大衆が李鵬首相のステートメントに納得することはけっしてないであろう。「李鵬打倒」「鄧小平引退」を叫ぶ学生たちは、今回の運動を歴史の新たなページを開く愛国闘争と位置づけているのであり、それを支持する輪が広がりつつあったということは、まさに五・四運動の再現を思わせるのみならず、中国の社会主義体制内

にもう一つの革命がいま開幕しつつあるといっても過言ではないと思う。

党中央の権力バランスは

このような民主化要求闘争の高まりの一方で、いま中国の権力構造内部では熾烈な路線闘争が展開されている。その路線闘争について、私の見方を説明してみよう。

よくマスコミ論調には、保守派と改革派という色分けが使われているが、私にいわせれば、それは正確ではない。現在の中国の権力構造内部には、保守派、原則派、改革派という三つの潮流があるとみたほうがより正確であり、最近では私の指摘する「原則派」という言葉も新聞などに取り上げられるようになった。

その原則派の長老が陳雲・党中央顧問委主任であり、その第一線のリーダーが李鵬だといっていいと思う。というのは、今日の中国には李鵬よりもさらに強硬な保守派が、とくに高齢の党長老を中心として存在するのであり、その代表格は王震・国家副主席、薄一波・党中央顧問委副主任らである。彼らは胡耀邦追い落としにも大きな役割を果たすなど、隠然たる勢力を維持している。

こうした保守派に対して李鵬首相は鄧小平と並び立つ長老である陳雲・党中央顧問委主任の系列とみられ、この派の人々は、市場メカニズム導入などの経済改革に当たっても社会主義の枠は絶対に守らねばならない、という社会主義の原則に忠実な立場をとる。つまり、社会主義の枠組みを外してしまえば、せっかく大きくなった鳥が鳥カゴを破って逃げ出してしまうという「鳥カゴ経済論」に立つ人たちであり、現在の政治局では姚依林・副首相もこの原則派の一人だといえよう。

こうした背景において今日の党中央は、鄧小平ワンマン体制のもとに五人の政治局員が配置されている。原則派の李鵬、姚依林、改革派の趙紫陽、それに胡耀邦とともに従来は積極改革派とされていた胡啓立がおり、喬石がいわば中間派であった。純然たる保守派は政治局内にはいない。

これら五人のなかでは最も急進的な改革派と目された胡啓立は、北京大学出身でかつて中国学生運動のリーダーとして活躍した人物であり、共産主義青年団の指導者でもあったが、胡耀邦失墜という事態に遭って変身し、いまでは学生たちの信頼を失ってしまって

いる。喬石は、原則派と改革派の中間的立場といわれてきたが、未確認情報によると、今回の学生運動に対しては当初、趙紫陽を支持しながら、情勢のヤマ場で李鵬に加担したという。

このような政治局員一人ひとりの政治的立場のほかに、今日の中国の事態をもたらしている一つの要因として、政治局メンバーの配置の問題を指摘することができると思う。本来、行政を担当する国務院は改革派が主導すべきであり、一方、イデオロギーに比重の大きい党中央は原則派が握ったほうが政策展開がスムーズにいくはずだ。

ところが現実には、胡耀邦を失墜させざるを得なくなった事態のなかで、改革派の趙紫陽が党を受け継ぐことになったために、本来は党官僚である原則派の李鵬が国務院総理（首相）のポストに就いたのであった。これはまさにミスキャストであり、鄧小平の人事構想の致命的な誤算だといえるだろう。今日の中国の悲劇、政策的行き詰いの大きな原因がそこにあるといえるかもしれない。

趙紫陽の微妙な〝立場〟

以上に指摘してきたような諸要因が絡み合うなかで、趙紫陽総書記は孤立化を余儀なくされ、出口を見いだすことができなかった。そのうえ、かつて趙紫陽の後ろ楯であった鄧小平は、今回の経済混乱の責任を趙紫陽に押しつけようとしていたのであり、鄧小平と趙紫陽との間の亀裂はすでに深まっていたものと思われる。

このことを端的に示したのは、五月十六日夕刻のゴルバチョフ・趙紫陽会談であった。私はたまたま衛星テレビの解説を担当していて、この会談の模様をつぶさに目撃したのだが、ゴルバチョフとの会談で趙紫陽は、意外なことに、「中国では一昨年秋の十三期一中全会以来、すべては鄧小平主任の決定に従っているのです」と述べた。ゴルバチョフの顔をまともに見ずに、伏し目がちにそういったのである。

この場面を目撃したとき、私はぎくりとしたのだが、なぜ趙紫陽総書記はその言葉を面をあげていえなかったのか。この言葉は党の重大機密事項を暴露したものだと早くも糾弾されているけれど、それは窮地に陥っていた趙紫陽が中国の学生、大衆に送ったメッセージだったのである。テレビ放送の画面を通じて、彼は自ら動きのとれない窮状を学生や大衆に訴え、そして、すべての責任は鄧小平にあるということをいおうとしたのではなかったか。

それほどまでに党中央の状況は深刻だったのであり、したがって、それをテレビを通じて訴えようとした趙紫陽の意図は、党中央にさらに深刻な波紋を投げかけたに違いない。それは当然、その翌日の趙紫陽失墜という衝撃的なドラマにつながっていったのである。

このようにみてくると、今日の中国の権力中枢における路線闘争はきわめて深刻なものであると判断せざるを得

ないのだが、こうした党中央の保守派、原則派の連合による強硬策にもかかわらず、先に述べたように、体制内部に民主化に呼応する動きがじわじわと高まっていたことは注目に値するというべきだろう。

では、この混沌とした状況のもとで趙紫陽はどうなるのか。現在のところは趙紫陽軟禁説、再浮上説などがさまざまに伝えられて、確たる判断材料は見当たらないが、民主化要求が最終的に勝利するような展望が開けるならば、趙紫陽復権の可能性も出てこよう。しかしながら、そのためには、李鵬の失墜、さらには鄧小平の退陣という政治的変化が必要なので、そう簡単にはゆかないだろう。強硬派有利となれば、党中央での趙紫陽勢力が急速に瓦解し、李先念、万里のような穏健派も雪崩を打って李鵬支持に傾くのではないか。五月二十五日を境に李鵬らの強硬派が局面を制圧しつつあるようであり、民主化にとっては茨の道を当面は避けがたいかもしれない。

鄧体制を揺さぶる学生のデモ

だが、一方で、趙紫陽その人も経済改革の混乱を引き起こした張本人であり、必ずしも中国民衆の希望の星ではなくなっているというところに深刻な問題がある。学生や市民の間では、もう誰が出てきたにしても、あんな路線闘争に明け暮れている共産党の幹部たちには愛想が尽きた、というのが本音ではないか。したがって、当面の路線闘争の行方を、単に党中央のレベルのみならず、もっと広い視野のなかで見つめてみることも必要であると思う。

老師・鄧と学生・ゴルバチョフ

五月十五日から四日間にわたって行われたゴルバチョフ・ソ連共産党書記長の訪中は、それ自体きわめて大きな歴史的な意味をもつものであった。そして、ゴルバチョフ訪中が学生運動の再燃という思わぬ副産物を残して、中国に大きな混乱を生じさせたという結果においてもきわめて劇的であり、同時にそれは、今日の社会主義諸国が民主化や経済改革をめぐってはらんでいる矛盾と危機をそのまま反映したものでもあった。

もとより中ソ対立は過去三十年にわたって、論争から対立へ、そして和解へというプロセスを経てきただけに、その三十年間を通じての当事者であった鄧小平にとって今回のゴルバチョフとの会談は、それこそ万感胸に迫るも

のがあったに違いない。実際、ゴルバチョフ・鄧小平会談を見た限りでは、いまを時めくゴルバチョフ書記長といえども、年輪の差もあってか、鄧小平の前では老師の前の学生といった観を呈していたように思う。

ところが、まさにその〝世紀のサミット〟をなし遂げた鄧小平に対して、中国民衆の共感はまったくなかったのである。ここに事態の深刻さがあるといえよう。非毛沢東化を実現し、いまは中ソ和解をなし遂げた鄧小平をねぎらうどころか、学生や市民大衆の鄧小平指弾の声は激しさを増すばかりであった。これでは、中ソ首脳会談後の引退を考えていた鄧小平も、そのチャンスが失われ、彼の権威は地に堕ちたといわざるを得ない。

中国の経済改革が緒についた一九八四～八五年の段階で鄧小平が完全に引退し、政治改革に着手していたならば、今日のような民主化要求デモは起こらなかったろうし、現在のような政治的、経済的混乱も避けられたであろう。そして彼自身は、非毛沢東化の英雄として歴史に名を残したかもしれない。しかしながら実際には、最高実力者としてあまりにも長く君臨し続けたために、彼の死後にまで、鄧小平批判は及ぶだろうという皮肉な結果を招いたのである。

ソ連が抱える二大難問

一方、ゴルバチョフ書記長はいまや世界のスターであり、中国でも「ペレストロイカ」と「グラスノスチ」を掲げる民主化の旗手として、圧倒的な歓迎を受けた。ゴルバチョフにとっては、思わぬドラマだったのであり、民主化デモが制圧されて中ソ関係に亀裂が入るということにでもなれば、ゴルバチョフの重大な誤算ということにもなりかねない。いずれにせよ、ゴルバチョフ自身は訪中によって、経済改革を伴わない民主化の危険、社会主義の枠組みと市場メカニズムという根本的な矛盾を調整することの難しさ、その調整の失敗が引き起こす混乱の深刻さ、といったことについて多くを学んだであろう。

むろん、ゴルバチョフにとって今回の中ソ首脳会談は大変な成果であり、それが彼の政治的基盤を大きく強化したことは疑いないが、中ソ和解を達成したゴルバチョフ書記長の前にはさらに重要な課題が待ち構えている。それは民主化やグラスノスチによってソ連人の意識はかなり急速に柔軟化しているものの、ソ連の経済状態は一向に改善されていないからである。いうまでもなく、ソ連はきわめて硬構造の社会経済システムをとっている社会主義先進国であって、非常にソフトな体質をもつ社会主義発展途上国の中国との間には大きな違いがある。

中国の場合は、政策が変わると表面だけはきわめて急速に動く反面、そこには混乱が生じて内部が固まらないという脆弱性があるのに対し、ソ連の場

合には、上からの掛け声がかかっても硬直しているシステム自身がなかなか動かないという、まさにソ連社会の宿痾のような病根を宿している。したがって、ソ連の改革はこれから本格的な困難にぶつからざるを得ないと思われるのである。

そこで今後は、ゴルバチョフ書記長の政治的基盤の強固さが問われてくるわけだが、その点で私は、日本の多くのクレムリノロジストとは違って、ゴルバチョフの政治的な基盤はかなり強固であるとみている。それは何よりも、彼が政治改革を求めるソ連の知識人や大衆に支援されているからであって、代議員選挙の複数候補制や人民代議員大会の改組など、最近の一連の政治改革にもみられるように、ゴルバチョフの改革意欲はすこぶる盛んである。

ソ連にとっての最大のネックは、経済の活性化がなかなか進展しないことであり、今後この面ではゴルバチョフ書記長も長期の格闘を余儀なくされるであろう。

ゴルバチョフにとっての第二の問題点は、いわゆる民族問題である。中国でも、この三月にはチベット族の反乱に対して戒厳令が布かれたが、ソ連の場合は、政治改革と民主化が進めば進むほど、すでにロシア民族以上の人口比を占めている非ロシア系民族の自治権拡大運動、あるいは分離運動が大きく盛り上がってくるという状況にある。これはゴルバチョフにとっては深刻なジレンマといわざるを得ない。

昨年はアルメニア、アゼルバイジャンで多数の死傷者を出すような暴動が発生しており、また最近では、スターリンの出身地であり、シェワルナゼ現外相の故郷でもあるグルジアにまで民族反乱が飛び火している。さらに、ウクライナやバルト三国におけるロシア帝国からの離反傾向は歴史的衝動ともいえるほど根深いものがある。

こうしたソ連邦内部の体制的な矛盾

自分の体を守ろう
スキンレス。
スキンレス
SKINLESS
オカモト株式会社

をゴルバチョフ書記長がどのように処置していくのかについては依然として未知数であり、また、そう簡単に解決のメドがつくとも思われない。ここにゴルバチョフの苦悩があるわけで、ソ連としては対外的には本格的な平和外交、軍縮外交に力を注ぎ、国際環境を改善することが急務となる。

そして、まさにその点で、ゴルバチョフのいわゆる「新思考外交」はきわめて大きな威力を発揮しており、日本以外の西側諸国との首脳会談を活発に行うことによって、ソ連を取り巻く国際環境は大幅に改善されつつあるといってよい。中ソ和解はその「新思考外交」による国際環境改善の総仕上げであり、こうした面におけるゴルバチョフ書記長の功績は画期的なものがあるといわなければならない。

マルクス主義の終焉

最後に、中ソ首脳会談とそれに続く中国の政治危機を、さらに大きな視点から見渡してみたい。

中ソ首脳会談をひとつのヤマ場として、この四月以来、中国で進行してきた状況をつぶさに見ていると、果たして社会主義とは何かということが根本的に問われざるを得ないように思われる。そして同時に、二十世紀は革命の世紀といわれたにもかかわらず、革命国家というものがいかにコストの高いものであり、犠牲の大きい社会であるかを、いま人類は学びつつある。

アジアにおいては、台湾、韓国などの周辺諸国が、経済的に中国とは比べものにならないくらいの発展を遂げ、いまやNIES(新興工業諸国・地域)から先進工業国への移行期に差しかかっている。そうした全体的状況のなかで、社会主義以外のアジアは、いずれの国や地域も経済の発展によって中間層が大きく膨んだヒシ形構造の社会に成長してきているだけに、もうアジアには社会主義革命は起こらないであろう。

それどころか、中国の今日の動き、ソ連・東欧諸国における今日の動きがまさに示しているように、社会主義は成熟すればするほど内部からの自由化圧力が高まるという状況が世界のあちこちにみられるのである。そうした状況において特徴的なのは、社会主義を離脱しようとする方向こそが「改革」であり、進歩だという論理とコンセンサスであるといってよい。

まさに歴史は一回転して、いま時計の針はもう一度逆回転しようとしているかに思われる。十九世紀のグランドセオリーであったマルクス主義は二十世紀の国民・国家レベルにおける実験を経て、二十一世紀にはひとつの純粋な社会思想として教科書に書かれるだけのものになっていくのではないか。

ともあれ、このような現実を考えたときに、中国の今日の危機的な事態は、そしてソ連における諸困難は、多くの人びとに、革命とは何であったか、そして二十世紀とは何であったかを考えさせずにはおかないであろう。

★秘伝のお酢で

佐光 隆
(画家)

私の話は、料理そのものというより、むしろ〝料理番外編〟とでもいおうか。

かつてラグビーや剣道で鍛えた体を、三十〜四十歳代にかけて酷使した時期があった。当時の私は、週刊誌、月刊誌、新聞と、もう大人と子ども、SFとチャンバラとメカ、ありとあらゆるジャンルのさし絵をこなし、まわりからも何をやっているんだ、といわれたりもしてね。無茶ばかりして、救急車で運ばれたことも何度かある。

そんなことをくり返しながら、まさしく体が欲して食べ始めた(?)のが、〈お酢〉との出会い。実は私の友人の一人に是枝という男がいる。満鉄育成学校の同期で、剣道の高野茂義先生の門下生同士なのだが、彼と一緒に飲むと、必ず杯に入った透明な液体が横に置かれていて、これが酢だということを教えられたのである。

〈お酢〉を使った料理といってまず思いつくのは鮨。私の生まれは高知だし、家内も純粋の土佐っ子ときているから、おいしい魚には縁が深かったのかもしれない。私は中野に住んでかれこれ二十年以上になるが、自宅の近くに築地直送の新鮮な魚を売り物にしている感勢のいい魚屋がある。そこで買ったイワシを三枚に下ろし、お酢に漬け、バッテラみたいにご飯にのせる。これが好物で、ちっとも飽きない。何日このイワシの鮨が続くか、なんていって二週間以上も食べ続けたことも……。それくらい好きなのである。

私は二時間おきに食事、といっても一回ににぎり鮨で二個程度の昼なのだが、食べながら仕事をする、なんてこともあるので、鮨は便利でいい。加えて、バランスを保つために間にチーズやニンジン、トマトなどもはさんで食べてしまう。和食はコレ、なんて決めつけないで、試してみると、思わず〝イケる〟ものを発見できることもある。

ただしこの〈お酢〉にはちょっとした秘訣がある。それは市販の酢に新鮮なユズのしぼり汁を七対三の割で混ぜること。ユズの香りがよくて、もうこれに慣れると麻薬みたいなもので病みつきになる。近頃では、ホカホカのご飯に〈お酢〉をそのままかけて食べちゃったりもする。何を食べるのにも欠かせないのである。

私の好物は前述のイワシを始め、アジやカツオのたたきなど、あまり手を加えないものばかり。京都の料理みたいに加工する必要はなく、素材そのままを味わいたい……というのが私の食事哲学でもある。カツオといえば、最近新しい食べ方を発見した。ニンニクを少し厚目に切り、カツオの鮨の上にのせる。〝歯がニンニクを通してカツオに刺さる〟、この感覚がたまらない。ただし次の日は誰にも会えないが……。

イラスト/畑田国男

うちの自慢料理